

〔論文〕

バレット写本現代訳（1）

浜島 敏*

序

一般的に、日本語の聖書翻訳の歴史はプロテスタントの宣教とともに始まったと考えられ、一般的にギュツラフ訳ヨハネ伝が最初のものでされているが、日本にキリスト教が伝えられたのは、それよりも300年も前のことであった。カトリック教会は、祭儀を重んじ、確かにプロテスタント教会のように、「聖書のみ」というように聖書そのものに最終的權威を置くことをしていないために、聖書翻訳に対する熱意はプロテスタントほどではなく、相対的には聖書が軽んじられていると考えられなくもないが、もちろん、キリスト教の伝えられるところ、聖書が伝えられないことはあり得ない。ギュツラフ訳をもって聖書翻訳が始まるという考えが多いのは、上の理由の他に、現存する資料がないため、その実態を知ることができないのも大きな理由となっている。また、聖書翻訳史に関する本がほとんどプロテスタントの側から書かれたと言うことも理由の一つかも知れない。また、新村『南蛮文学』（『岩波講座日本文学』）の「（聖書の）日本訳は在り得べきでない」という記述から来る誤解も、カトリックの翻訳がないとの見解が広まる一原因となっているであろう。カトリック側の聖書翻訳に関する論文は数種あるが、本の形をなしているのは、筆者の知る限り、カラン他による『日本語の聖書』（1958）が唯一のものである。これも、パンフレット程度の簡単なものである。

* Bin HAMAJIMA 本学名誉教授

(1) キリシタン時代の和訳聖書

キリシタン時代に聖書が翻訳されたという記録はいろいろ知られている。まず、シャビエルの日本宣教を思い立たせたという「ヤジロウ」は、マタイ伝を日本語に直したと伝えられている。もちろんこれが全訳であったのか、部分訳であったのか、あるいは要約であったのか、全く知る術はない。しかし、それが、どのようなものであり、たとえどんな珍訳であったとしても、最初の日本語訳としては意味深いものであり、現存していないのが残念である。フェルナンデス (Juan Fernandez, 1525-68) が、四福音書の翻訳を試みたらしいが、彼の原稿は1563年、度島の聖堂の火災で焼失した。また、有名なフロイス (Luis Frois, 1532-97) も1565年頃、福音書翻訳を行ったという記録がある。もっとも、これらも実際にはどの程度のものであるかは、現物がないため、知ることは出来ない。さらに、イギリス人セーリス (英国商館) の書簡によって、新約聖書が日本語で出版されていることが伝えられている (新村はこれを「何かの誤りであろう」としている)。また、カトリック側からの記録からも、1613年までに、イエズス会士によってミヤコ (京都) において新約聖書が印刷されたことを記録している。それが小型フォリオ版であるという詳細な記録まであり、セーリスの記録と合わせて、確かに日本語の新約聖書が存在していたであろうことは、ほぼ確実である。しかし、これも現存しておらず、どのようなものであったのかの確認はできない。

さらに、いわゆるキリシタン文学と言われている数多く現存するキリスト教関係の作品の中には聖書の引用がかなり多い。代表的なものが「ドチリナ・キリシタン」である。これには、「主の祈り」(パアテルノステル)「十戒」(十のマンダメントス)「八福」(ベナベンツランサ)などの引用がある。また、ポルトガルのエヴォラにおいて発見された屏風の下張りに聖書の断片が見つけられた。さらに、ポーランドのクラクフ市にあるヤギェヴォ大図書館で天正遣欧使節の一人が書いたとされる、詩篇を書いた文書が発見されたことが最近報道された。しかし、これらはいずれも断片であり、聖書全体を知るには不十分である。

それに対し、1591年の年号が記されているバレット写本といわれるバチカン所蔵の写本 (Reg. Lat. 459) は、福音書のかなりの部分 (全体の三分の一、マタイ伝については半分が翻訳されている) が含まれている。これは、日曜日毎、また

祭日に読むために指定された福音書の個所を集めたものである。元来は礼典用の日課表として書かれたものであって、聖書の記事の順番にはなっていないが、その資料としての多さは注目に値する。また、当時の日本語聖書翻訳の姿を知る大きな手がかりとなる。

バレット (P. Manoel Barreto, 1564-1620) は、ポルトガルのフェイラで生まれ、若い頃インドに渡り、そこで1579年イエズス会に入会する。ゴアで神学を修め、1590年(天正18年)、天正遣欧使節やヴァリニアアーノ神父と共に来日、1603年にはセルケイラ司教の秘書となる。このとき、「太平記」の原稿を検閲している。13年マカオに行き、日本管区との連絡業務を担当したが、再び17年、激しい迫害下の日本に戻り、各地で活動をした後、20年江戸近辺で没した。語学に勝れ、「日本語を甚だよく理解し」と報告されている。日本語で説教したことが度々報告されている。『葡羅日辞書』の編纂としても知られており、日本語を学ぶとともに、天草のコレジオでラテン語教師を務めた。最初の来日で日本語を学んでいるころ、すなわち1591年に彼によって聖書翻訳を含む写本が作成され、それがバチカン図書館に所蔵されていたが、1940年にシュッテ (Joseph Schutte) によって発見された。バレット自身が翻訳したものではなく、彼が日本語学習に専念していたときに、当時すでに作られていたキリシタン物語や和訳聖書、聖人伝などをまとめたものであると考えられている。日本に来たパーデレヤイルマンたちの日本語学習のため一種の日本語教科書として、また、布教のための説教資料として、編まれたものであろう。これが、他の翻訳とどのような関係があるのかは、今のところ確認は出来ないが、フェルナンデスもしくはフロイスを基にしたものではないかと言われている。

写本は382ページからなり、(1)日本に奇跡的に現れた十字架についての短い話、(2)年間の日曜日と主な祝日のミサの福音書、(3)天使の王妃であるわが聖母のいくつかの奇蹟、ロレートの聖なる家の話、(4)何人かの聖人の栄光ある生涯、の四部からなっている。そのうちの第二部が192ページから出来ており、いくつかの部分に分けられている。まず「年中の主日並びに年中の主なる祝い日のエワンゼリヨ」と書かれた第一部で(4-59v)、日曜日、さらに復活祭などに読まれる福音書が含まれている。次は、四福音書のハーモニーである「われらが主ゼズ・キリシトの御受難」と書かれた受難物語である第二部(60v-83)であり、最後に

は「諸々のサントスの特定のエワンゼリヨ」が書かれている第三部（84-100 v）となっている。ほとんどは福音書抜粋からの翻訳であるが、二部の最後に受難の道具に関する若干の対話、第三部の途中に「ナタル（クリスマス）という祝」と名付けられた瞑想があり、これらは聖書の翻訳とは直接関係はない。2000年に東京で開催された「東京大聖書展」において、バレット写本が展示された。死海写本が目玉の展示であったのでやむを得ないかもしれないが、小型で目立たない小さな開かれた写本はほとんど注目する人はなく、素通りされていたが、筆者は感動をもってその前にしばらくたたずみ、何度もそこに帰っては見直したのを覚えている。400年前に日本にキリスト教を伝えようとして日本にやってきた宣教師たちの手によって最初に日本語に翻訳された聖書の言葉がそこにあった。

（2）カトリック教会と聖書翻訳について

カトリック教会は、コンスタンツ会議（1414-18）（www.piar.hu/councils/ecom16.htm）において、聖書翻訳を行ったウィクリフを異端とし、さらに、対抗宗教改革を目的としたトリエント会議（1545-63）（www.fsspxjapan.fc2web.com/tridentini/tridentini4.html）のうち、第四総会（1546.4.8）において、外典を含む「正典」が定められ、ラテン語訳聖書ウルガタこそ「正真正銘」の聖書であると宣言され、これから外れた解釈は禁止された。地域語への翻訳についても、厳しく戒められ、ローマ法王庁の認可のない聖書は、以後ヨーロッパにおいては実質的に禁止された。トリエント会議では禁書目録が定められ（www.aloha.net/~mikesch/ILP-1559htm）、これを破ることは厳しく戒められた。禁書のリストには聖書として、Biblia omnia vulgari idiomati（俗語によるあらゆる聖書）とあり、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、英語、オランダ語などの聖書が挙げられている。当然、ギリシア原典の研究も行われなかった。そんな理由から、カトリック教会が聖書翻訳を全く行っていないような誤解があるが、聖職者の間では聖書研究は盛んに行われていたし、翻訳も皆無であったわけではない。もっとも、これらの翻訳は原典からではなく、ラテン語ウルガタからのものであった。日本に派遣された宣教師たちは、非常に優秀な学者たちであったし、彼らが聖書を無視していたことはない。ただ、当然トリエント会議の影響下におかれていたので、一般信徒がそれを読むことは禁じられていた。日本語翻訳につ

いても、おそらく信徒に広く読ませるためではなく、聖職者たちの研究のために、また礼典遂行のために翻訳されたものであろう。彼らのテキストとして用いた聖書はラテン語ウルガタであったことは間違いない。ただ、バレット写本を見る限り、必ずしもウルガタ原典に正確な直訳的なものではなく、かなり自由なものであったことが知られる。そればかりか、原典から外れ、中世の伝統に基づいて付加されている部分も見られる。

(3) ローマ字表記

ヨーロッパの言語で日本語が初めて表記されたのが、キリシタン時代のことであり、実に多くの文献が存在している。言語学的には、当時の日本語を知る手がかりとして非常に貴重なものである。キリスト教文書のみに限らず、『平家物語』や『伊曾保物語』なども出版されており、また日本語も研究され、ロドリゲスは『日本大文典』を著しているし、『日葡辞典』(*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, 1603、以下『日葡』)も出版されている。これらの日本語に関する文献は、西洋人によって書かれた最初の系統だったものであり、ローマ字表記されているだけに、当時の発音の手がかりを得る大変貴重な資料となっている。

ポルトガル人はポルトガル式ローマ字を発案した。ポルトガル式ローマ字表記に統一されたものがあったわけではないが、おおよそは同一のものが用いられていた。『日葡』に取り上げられているのが基本になるであろうが、ロドリゲス『日本大文典』にもすこし異なった表記が上げられている(五十音一覧表は、ロドリゲス(復刻)の351-352ページに挙げられているし、『日葡』の和訳版には補遺として3ページにわたって表記の解説が書かれている。バレット写本の表記も、大方はそれらと共通しているものの、中には独特のものもある。次に、これらを参考にして、一覧表を掲げる。それに先立って、一つだけ注意しなければならないのは、文字として、iとj、uとvが、それぞれ前者が母音、後者が子音として分離表記されるようになるのは18世紀になってからであるので、16世紀の文書であるバレット写本にはこれらの区別がない。したがって、例えば「を」はvoともuoとも書く。

①ア行

あ	い	う	え	お	や	ゆ	よ
a	i,j,y	v,u	ye	vo, uo	ya	yu	yo

「い」にいくつかの表記があるが、iとjは同じものと見なしても良いので、実際には、「い」はica^yで表記されていることになる。「う」と「お」についても、uとvが同じものであるので、実際には一種類と考えて構わない。「エ」がyeと書かれていることに注目。「江戸」はYedoと表記されたが、当時の発音が[je]であったことを教えている。現在でも「円」をyenと表記するのは、当時のなごりである。家康を三浦按針はジェームズ王宛の親書でYeYeYeasと表記している。「お」の発音については、ワ行参照のこと。

②カ行

か	き	く	け	こ	きゃ	きゅ	きよ
ca	qi, qui	cu, qu	qe, que	co	quia	quiu	quio

「き」と「け」がquを使っていることは、ポルトガルの表記にしたがっているだけである。すなわち、ci, ceはそれぞれ[si][se]音になるためである。quは英語のように[kw]と発音されず、[k]と発音される。ただ、uを含まないqi, qeも用いられている。

③タ行、サ行

さ	し	す	せ	そ	しゃ	しゅ	しよ
sa	xi	su	xe	so	xa	xu	xo
た	ち	つ	て	と	ちゃ	ちゅ	ちよ
ta	chi	tcu, -t	te	to	cha	chu	cho

タ行は元来[ta, ti, tu, te, to]であったが、中世後期までに「ち、つ」については[tʃi, tsu]と破擦化した。サ行は[ts]音であって[tʃa, tʃi, …]であったのが、摩擦化して[ʃa, ʃi, …]、あるいは[s a, si…]となったと考えられている。キリシタン時代には[sa, ʃi, su, ʃe, so]が標準的であったが、その後東国から[ʃe]はやがて[se]に変化し、関西に及んだ。

④ダ行、ザ行の統合（四つ仮名）

ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	じゃ	じゅ	じよ
za	ji	zu	je	zo	ja	ju	jo
だ	ぢ	づ	で	ど	ぢゃ	ぢゅ	ぢよ
da	gi	dzu	de	do	gia	giu	gio

元来、ダ行は[da, di, de, do]であったが、中世後期までに[dʒi, dʒu]と破擦化した。ザ行は[za, zi…]であったのが、「じ、ぜ」は硬口蓋音化して[ʒi, ʒe]となった。この時点では「ぢ」[dʒi]と「じ」[ʒi]、「づ」[dʒu]と「ず」[ʒu]は、表記上だけでなく発音でも区別されていた。少なくとも、『日葡』においては、「自信」はlixin、「地震」はGixinと区別して表記されている。しかし、16

世紀末頃からこの四つ仮名の混同が始まった。ロドリゲスもこれらが京都では混同されていると伝えている。ただ、これらの表記について、ポルトガル語では破擦音を持たないので、そもそも [dzu, dʒi] の発音がなく、gi, ji, dzu, zu の表記上の区別は日本語表記用に考案されたものであろう。「ぜ」についても、そもそもは [ʒe] であったものが、実際に日本人の間では [dʒe] とも発音されていたのではないかと推測される。同じようにして、「ざ、ぞ」についても、元来の [za, zo] と破擦化した [dza, dzo] が混用されていたのではないかと推測される。19世紀に出版されたヘボンの『和英語林集成』においては、「自信、地震」はともに jishin と表記され、ただカタカナ表記のみ前者を「ジシン」、後者を「ヂシン」と区別して表記している。

⑤ナ行

な	に	ぬ	ね	の	にゃ	にゅ	によ
na	ni	nu	ne	no	nha	nhu	nho

拗音で nha, nhu, nho を使用しているのは、ポルトガル式表記で、[ɲ] 音であることを表している。ただし、「に」が [ɲi] であるにもかかわらず、nhi となっていない。

⑥ハ行

は	ひ	ふ	へ	ほ	ひゃ	ひゅ	ひよ
fa	fi	fu	fe	fo	fia	fiu	fio

ハ行音は、歴史的には、両唇破裂音 [p] から両唇摩擦音 [ɸ] に変化し、江戸時代に「ふ」を除いて、現在の声門摩擦音 [h] になった音である。16世紀のハ行音が両唇摩擦音 [ɸ] であることが知られる。とはいえ、ポルトガル語は [ɸ] 音を持たないため、歯唇摩擦音 [f] で代用表記している。これは、「ふ」をヘボン式ローマ字で fu と表記するのと同じ理由である。

⑦マ行

ま	み	む	め	も	みゃ	みゅ	みよ
ma	mi	mu	me	mo	mia, mea	miu	mio

特記することはない。ただ、「みゃ」に二通りの表記がある。

⑧ヤ行（拗音参照）

や	い	ゆ	え	よ
ya	y	yu	ye	yo

ア行参照。「い」がア行の「い」と合わせ、i, j, y の三通りの表記が可能である。「え」が ye と表記・発音される。

⑨ラ行

ら	り	る	れ	ろ	りゃ	りゅ	りよ
ra	ri	ru	re	ro	ria, rea	riu	rio, reo

「りゃ」と「りよ」に二通りの表記がある。

⑩ワ行

わ	ゐ	う	ゑ	を
va, ua	i, y	v, u	ye	vo, uo

「を」をvoと表記しているが、これは今も方言などで同じように[wo]と発音される。ただし、ア行の「お」も同じ表記がされていること注意。「を」と「お」が同じ音価を持っていることが分かるわけであるが、逆に当時単純な[o]がなかったことを示している。明治初期の文献には、外来語表記などで「ゐ」を[wi]、「ゑ」を[we]、「を」を[wo]と発音させていた。すなわち、すべてワ行で表記することがしばしばあった（vita sexualis森鷗外『キタ・セクスアリス』、『エ・ニスの商人』、『ワ・ーニヤ伯父さん』。また最近、ウスキー(whiskey)、エスト(waist)、ウォーター(water)の復活もある人たちの間では考えられている。17世紀のポルトガル表記では「ゑ」は、ヤ行(ye)で表記されることが一般的であったし、そう発音されていた。16世紀には「ウイ」「ウエ」の音は存在していない。

⑪ガ行

が	ぎ	ぐ	げ	ご	ぎゃ	ぎゅ	ぎよ
ga	gui	gu	gue	go	guia	guiu	guio

「ギ」「グ」がguを用いるのは、ポルトガル式表記。giは「チ」の表記として用いられている。

⑫ザ行

ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	じゃ	じゅ	じよ
za	ji	zu	je	zo	ja	ju	jo

「ジ」「ゼ」がji, jeとなっていることに注意。「ジ」をjiと表記するのは、ポルトガル式表記にしたがっており、英語式でjiとするのと同じである。「ゼ」がjeになっていることは、当時の日本語の「ぜ」の発音が[ze]であったことを示している。

⑬ダ行

だ	ぢ	づ	で	ど	ぢゃ	ぢゅ	ぢよ
da	gi	dzu	de	do	gia	giu	gio

「ヂ」「ヅ」に注意。当時は四つ仮名が標準であったため、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」は表記だけでなく、発音も異なっていた。すなわち、「ジ」[ʒi]、「ヂ」[dʒi]、「ズ」[zu]、「ヅ」[dzu]

とそれぞれ発音されていた。これらは、今も方言として残っている地域がある。

⑭バ行

ば	び	ぶ	べ	ぼ	びゃ	びゅ	びょ
ba	bi	bu	be	bo	bia	biu	bio

特記することはない。

⑮バ行

ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	ぴゃ	ぴゅ	ぴょ
pa	pi	pu	pe	po	pia	piu	pio

特記することはない。

⑯長音・拗音の長音

くー	こー (かう)	(こう)	きゅー	きょー (きやう)	(けう)
cũ, cû	cõ, cõ	cô	qiũ, qiû	qiõ, qeõ,	qeô, qiô
すー	そー (さう)	(そう)	しゅー	しよー (しやう)	(せう)
sũ, sû	sõ, sõ	sô	xũ, xû, xiũ	xõ	xô
つー	とー (たう)	(とう)	ちゅー	ちよー (ちやう)	(てう)
tcũ, tcû	tõ, tõ	tô	chũ, chû	chõ	chô
ぬー	のー (なう)	(のう)	にゅー	にょー	(ねう)
nũ, nû	nõ, nõ	nô	nhũ, nhû, niũ, nhû	nhõ, neõ	neô, neô
ふー	ほー (はう)	(ほう)	ひゅー	ひょー (ひやう)	(へう)
fũ, fû	fõ, fõ	fô	fiũ	fiõ, feõ	feô, fiô
むー	もー (まう)	(もう)	みゅー	みょー (みやう)	(めう)
mũ	mõ, mõ	mô		miõ, meõ	meô, miô
るー	ろー (らう)	(ろう)	りゅー	りょー (りやう)	(れう)
rũ	rõ, rõ	rô	riũ, riû	riõ, reõ	rei, riô
ぐー	ごー (がう)	(ごう)	ぎゅー	ぎょー (ぎやう)	(げう)
gũ, gû	gõ, gõ	gô	guiũ, guiû	guiõ, gueõ	gueô, guiô
ずー	ぞー (ざう)	(ぞう)	じゅー	じょー (じやう)	(ぜう)
zũ	zõ, zõ	zô	jũ, jû	jõ	jô
づー	どー (だう)	(どう)	ぢゅー	ぢょー (ぢやう)	(でう)
dzũ	dõ, dõ	dô	giũ, giû	giõ	giô

ぶー	ぼー		びゅー	びょー (びあう)	(べう)
			biũ	biö, beö	beö, biö
ぷー	ぽー (ぽう)	(ぽう)	ぴゅー	ぴょー (ぴあう)	(べう)
pũ, pũ	pö	pô		piö	peö, piö

長音の特徴は、長音の「おー」を「おう」と「あう」をアクセント符号によって区別していることである。拗音の長音については、「よー」を「やう」と「えう」を同じように区別している。「てふ」「せふ」のような表記についての記述はない。基本的に「あう」が[ɔ]、「おう」が[ɔ]を表すが、現在もこれらを区別する方言を持つ地方もある。

⑩長音・鼻母音の表記

今、われわれが知っている英語式（あるいは日本式）ローマ字と違って、各種の発音区別符号（diacritical marks $\bar{\quad}$, $\tilde{\quad}$, $\hat{\quad}$ ）が付せられている。強勢符号（ $\acute{\quad}$ ）はあまり用いられていない。昇降符号（ $\hat{\quad}$ ）と降昇符号（ $\check{\quad}$ ）が長音を表すためにしばしば用いられており、両者は原則的に区別されている。また、『日葡』には用いられていないが、他の文書にしばしば現れるのが鼻母音符号tilde（ $\tilde{\quad}$ ）である。これは、鼻母音を表すために母音に付すものである。

⑪撥音の表記

「ン」については、ローマ字ではnで表記されることが一般的であるが、mもしばしば用いられる（nanban（南蛮）、qempiyxi（検非違使））。母音に鼻母音符号tilde（ $\tilde{\quad}$ ）を付した形もしばしば用いられる。ただし、『日葡』には例が見あたらない。

⑫促音の表記

「ッ」については、現在のローマ字と同じく、子音を重複させる形が一般的である。-cch-（cacchũ、甲冑）、-cc-（beccö、鼈甲）-cq-（tecqi、鉄器）、-pp-（teppö）、-ss-（sassocu、早速）、-tt-（fittö、筆頭）、-xx-（fixxi、必死）、-ttç-（nettçũ、熱痛）。-zz-という結びつきもあるが、これは「づ」を表すために使われており、いわゆる促音ではない。そもそも促音は有声音とは使われない。そもそも促音は有声音では用いられない。

(4) バレト写本のローマ字表記

バレト写本と上記一覧表とでは、原則的には共通するものの、ところどころで、

異なっている。特に上記と目立って異なっているのは、「つ」がccで表されることと、「づ」がzz、「ぢ」がjjiと表記されることである。また、ロドリゲスと『日葡』がそれぞれ印刷された本であるのに対し、バレット写本は、手書き原稿であるため、必ずしも統一性がない。それが当時の発音をよりありがままに表記していることもあり得るが、実際にそうなのか、あるいは単なる表記ミスであるのかの判断が困難な場合がしばしばある。同じ語が、いつも同じに書かれていないことがあるからである。バレット写本ではquaと表記されている場合がしばしばある。

(5) 16～17世紀の日本語発音について

①ハ行

ハ行音については、上古の無声両唇破裂音[p]から摩擦音[ɸ]に変化し、さらに「フ」を除いて、声門摩擦音[h]に変化した。キリシタン時代はちょうどその無声両唇摩擦音の時代である。ただ、「はは」で見られるように語中（二拍目以後の拍において）は、ワ行に発音されることもある。バレットにおいては、「はは」がfuaと表記され「はわ」（ファワ）と発音されていたことを表している。「ほほ」が「ほお」、「かほ」が「かお」などに変化し、助詞の「は」や「へ」が「わ」「え」と変化したのも、この流れであると考えられる。ただ、キリシタン時代には助詞「は」はuaと表記されているが、「へ」はyeと表記されている。

②ア行、ヤ行、ワ行音の統廃合

上代においては、ア行、ヤ行、ワ行はそれぞれ別個の音価を持っていた。「あ」「や」「わ」は現代でも区別されている。「い（ゐ）」については、ア行とヤ行の区別は上古からなかったが、ワ行の「ゐ」は[wi]として鎌倉時代まで区別されていた。「う」については、ア行とワ行は上古より区別がなかったが、ヤ行は「ゆ」として現代も残っている。「え」については、上古ア行の「え」は「衣」で表され、ヤ行の「え」は「兄」で表され、ワ行の「え（ゑ）」は「恵」で表されており、三者の間に混乱はなかった。ただし、ひらがなではヤ行の「え」は固有の文字を持っていない。ヤ行とア行の「え」は10世紀頃[je]に統合され、ワ行の「ゑ」は12世紀末までは[we]として区別を保ったが、その後これも[je]に統合され、江戸時代にすべて[e]となった。「お（を）」は、ヤ行は「よ」として今も残っているが、ア行とワ行は区別されていた。平安後期に両者は[wo]として統合され、

江戸時代に[o]となったと考えられている。

総合すると、キリシタン時代には、「い」と「ゐ」の区別はなく、いずれも*i*と表記されている。「ゑ」と「え」はやはり区別はなく両者とも*ye[je]*と表記されている。また、「を」と「お」については、同様に両者とも*uo[wo]*と表記されている。したがって、単純な*/e/*と単純な*/o/*の表記は用いられていない。これから考えられることは、本文中に、エロデス、エスキリバ、などが外来語表記として Herodes, escribaと書かれているが、[jerodesu], [jesukiriba]と「イエ」発音されていた可能性がある。同じように「オベリヤ」obelhaは[woberija]または[woberja]と発音されていた可能性が高い。

③タ行、サ行

タ行は元来[ta, ti, tu, te, to]であったが、中世後期までに[tʃi, tsu]と破擦化した。サ行は[ts]音であって[tʃa, tʃi, ...]であったのが、摩擦化して[ʃa, si, ...]、あるいは[sa, si...]となったと考えられている。キリシタン時代には[sa, ʃi, su, ʃe, so]が標準的であったが、その後東国から[Se]はやがて[se]に変化し、関西に及んだ。

④ダ行、ザ行の統合（四つ仮名）

元来、ダ行は[da, di, du, de, do]であったが、中世後期までに[dʒi, dʒu]と破擦化した。ザ行は[za, zi, ...]であったのが、「じ、ぜ」は硬口蓋音化して[ʒi, ʒe]となった。この時点では「ぢ」[dʒi]と「じ」[ʒi]、「づ」[dʒu]と「ず」[zu]は、表記上だけでなく発音でも区別されていた。16世紀末頃からこの四つ仮名の混同が始まった。ロドリゲスもこれらが京都では混同されていると伝えている。ただ、これらの表記について、ポルトガル語では破擦音を持たないので、そもそも[dʒu, dʒi]の発音がなく、gi, ji: dzu, zuの表記は日本語表記用に考案されたものである。

⑤鼻音挿入（特にガ行）

有声閉鎖音[b,d,g]の前で、[m, n, ŋ]が挿入される場合がしばしばある。ロドリゲスもこれらの音の前には鼻音あるいは鼻に掛かるような音を伴っていると述べている。（「まだ、まづ、味わい、上ぐる」が「まんだ、まんづ、あんぢわい、あんぐる」に近く発音される）。ただ、これが[manda, mandzu, andziwai, an guru, tombi]と考えるか、むしろ[mãda, mãdzu, ãdziwai, ãnjuru, tōbi]に近いかわからない。これは、現在の方言でも聞かれることがあるが（鳶⇒トンビ、昆

布⇒コンブ、まだ⇒マンダ、子供⇒コンドモ、籠⇒カンゴ、鏡⇒カンガミ)、標準語では聞かれなくなった形である。鳶を「とんび」、昆布を「こんぶ」と言うのは今もかなり全国的に広がっているし、「まんずまんず」などは、現代の東北方言などでも聞かれる。また、ガ行鼻濁音、すなわち[g]の前の[n]はいわゆるこの名残で、関東以北で用いられている。表記の仕方には、nがそのまま付加される場合、前の母音にtilde (˜) が母音に付加される場合があるが、語によっては、いずれの表記もない場合がある。この場合、単にtildeの表記を忘れた誤記なのか、あるいは実際にそう発音されていたのかは判断ができない。

⑥拗音

日本語の伝統的表記として、「しょう」には、「しやう」「しよう」があるが、『日葡』においては、これらが区別されている。「オウ」は[ɔ:], 「アウ」は[ɔ:]を表すものと考えられており、現在も一部の方言では残っている。『日葡』では、小国(シヨウコク、xôcocu)、生国(シャウコク、xôcocu)のように、違ったアクセント表記が与えられている。また、「恐怖」(キョウフ、qeôfu)「狂夫」(キャウフ、qiôfu)のように区別されている。「羊」(ヤウ、yô)「幼」(エウ、yô)「庸」(ヨウ、yô)であって、元来の「エウ」と「ヨウ」の区別はされていない。いずれにせよ、バレット写本については、これらはあまりはっきり区別されていない。

⑦合拗音

これは、漢字音の流入とともに用いられるようになり、「くわ、くゐ、くゑ、くを」は[kwa, kwi, kwe, kwo]、またその有声音である[gwa, gwi, gwe, gwo]が用いられていたが、鎌倉時代までに「くわ、ぐわ」を除いて、消滅した。「くわ、ぐわ」については、江戸時代までも使われていた。方言では今も用いられている。

総合的に考えると、16世紀の日本語は、古代の日本語から近世の日本語への過渡期であると言える。

⑧発音区別符号 (diacritical marks)

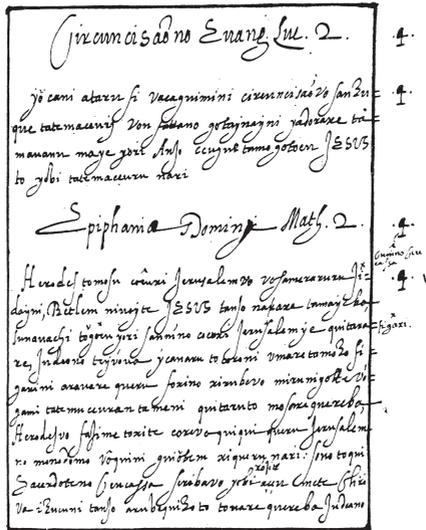
各種の発音区別符号(鼻母音符号も含む)は、しばしば省略されていたり、いつも同じ形が用いられているわけでもなく、非常にあいまいである。また、バレット写本ではyにdotが付されているが、今回編集のローマ字本文ではそれを省略

した。

(5) 日本語ローマ字表記の問題点

写本では、文字としてのxとrの見分けが非常に難しい。また、n,u, vの区別もほとんどつかない。「を」uoなのか「の」noなのかの区別のつかないものもある。日本語には[v]音が存在しないので、u, vは、あまり問題は起きない。ところが、iとjについてはいくつかの困難が伴う。例えばjiは極端な場合、「いい」とも「じ」とも読める。jjaは「いや」、「いじゃ」、「ぢゃ」とも読むことが可能である。読み方によっては「いいあ」とも読める。要するに、jが[ɟ]音を表すために用いられると同時に[i]音としても用いられ、さらに、jjと重ねた場合には[dʒ]音としても用いられるからである。そんなわけで、juというのが、「いう」なのか「ゆ(う)」なのかははっきりしない場合もある。

また、語の区切り方も一定ではない。母音区別符号も恣意的である。例えば「汝達」にはnandachi, nādachi, nadachiなどがある。また、iccuのように、文字だけからは「いつ」なのか「いっく」なのかが分からないようなものもある。次に写本がどのようなものであるか例として写本10ページのコピーを載せる。



写本10ページ、マタイ2章(本文173P参照)

(6) バレット写本先行研究

バレット写本については、キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』吉川弘文館出版、第七輯に非常に勝れた研究があり、その日本文翻字版が載せられている。さらに別冊として写本の写真版が出版されている。これがなかったならば、本論文は存在しなかった。他に、国語学の立場から、バレット写本の研究をし、論文を発表している学者達が数名いる。ただ、これらはいずれも学問的な立場で書かれた非常にアカデミックなものであり、日本語史の特に音韻史にさまざまな示唆を与えるものであるが、一般の読者にとってはかなり困難なものである。

(7) バレット写本現代訳編集方針

今回、バレット写本のうち、前半の聖書日課の部分と各祝日の聖書朗読箇所のみ、聖書の記事の順番に合わせて編集し直し、それぞれ、新共同訳との対訳とし、各区切り毎にローマ字表記と注を付した。ローマ字本文は、写本の誤記にはasteriskを付し、注に正しい綴りを載せた。日本語本文の方は、正しい綴りに基づいて翻字した。ローマ字の母音区別符号については、写本そのもののがかなり恣意的であるので、昇降符号と鼻母音符号のみを付した。日本語本文では四つ仮名（四つ仮名についても、写本ではかなり混用が見られる）と合拗音（注を付した）については、現代表記を用いた。鼻母音については、多少不自然なものもあるが、「ん」を挿入した。濁点については、原文のままとした。

写本には傍注および欄外注がかなりある。内容的には二種類あり、一つは本文の見直しによって、欠けていた部分を追加したものであり、今一つは、語の解説、または言い直しである。これには、ポルトガル語による解説と、日本語によるものがある。本書では、追加部分については、そのまま日本語本文とローマ字本文に組み込んだ。解説注については、ローマ字本文のみにし、（ ）内に示したが、中には省略したものもある。ポルトガル語による解説については、省略した。注の部分の誤記については、訂正したものを載せている。ローマ字の区切りは、読みやすさを中心に考えたので、必ずしも統一されていないことを了解していただきたい。また、形態素を基にした区切り方でも必ずしもないこともお断りしておく。ローマ字本文の部分には、バレット写本のどの部分に掲げられているかを示すため写本のページを記した。将来写本を研究するための便宜を資するた

めである。

マタイ 6 : 9-13のいわゆる「主の祈り」の部分は、バレット文書にはないが、『ドチリナ・キリシタン』から採った。マタイ伝とヨハネ伝からの記事が多いが、分離しにくい部分が多いことをお断りしておく。26章~27章の部分である、「受難物語」は、四福音書の記事が混在しており、どの部分の引用であるかは、おおよその見当はつくものの、どの福音書かを断定しにくい部分も多い。ヨハネ福音書の部分は、かなりはっきりしているが、共観福音書の部分は特に難しい。もともとが受難の記事を物語風書いているので、全体の流れとして見るように書かれている。今回は、その中からマタイ伝とおぼしき部分を中心に引用した。

このような形でバレット写本が出版されるのは、我が国では初めてのことである。キリシタン時代の聖書翻訳の一端でも触れていただくのが目的である。読んでみて、意外と読みやすく勝れた翻訳であることに気づかれることと思う。全体の印象としては、外来語が多いとはいうものの、日本語としては、かなりこなれた良い翻訳であると言える。

今回は、研究書と違って読んでいただくことを目的にしているので、原写本を見直し、漢字もできるだけ易しくし、仮名遣いも現代遣いで統一した。また、「キリシタン研究」の誤読もいくつか見つけられたので訂正した。もともと、ローマ字で書かれたものであるので、どのような漢字を用いるかは、編者の判断による。16世紀の日本語を現代仮名遣いで表すことについては、ご批判もあるであろうが、本書の目的をご理解いただきたい。ただ、問題になる個所については、注を付した。

そもそも一般の読者に読んでいただくことを目的としているが、ローマ字表記を供したことによって、研究者のためにもそれなりの資料としても資することができたと思っている。ローマ字本文については、誤記と思われるものは修正し、パンクチュエーションを付けた形で編集した。このような形でこれが公表されるのも、日本では最初である。

福音書抜粋であるのに、今回出版した部分に、イエスの復活の記事がないことを不思議に思われる節もあるかもしれないが、それはカトリック教会が復活を軽んじていたためではない。「受難物語」の部分に含まれている復活の記事は、ほとんどがヨハネ伝からの引照であるために、ここに載せられていないだけのこと

である。カトリック教会のために弁護しておく。将来、他の福音書も含め全体を出版したいと願っている。

そもそもこの研究が、キリスト教徒として、聖書を読んで欲しいということが出発点であったために、専門家から考えると初歩的なミスをしている可能性が十分にあるが、筆者の意向をご理解いただけたら幸いである。しかし、同時にいかなる批判をも喜んでお受けする覚悟であるので、今後ともご批判、ご教示をお願いしたい。

最後に、現代語訳の対訳テキストとして「新共同訳」の使用を許可して下さった日本聖書協会に感謝する。

参考書

テキスト

海老澤有道他編著『キリシタン研究』第七輯、および別冊（バレット写本復刻）

島正三『ロドリゲス日本大文典』*ARTE DA LINGOA DE IAPAM COMPOSTA*、(1604版復刻) 文化書房博文社、1969

小島幸枝『どちりなきりしたん総索引』（『どちりなきりしたん』1600版および*DOCTRINA CHRISTAN*、1600版復刻）、風間書房、1971

海老澤有道他編著『キリシタン教理書』（キリシタン文学双書）、教文館、1993

辞書

大野晋他『岩波古語辞典』岩波書店、2004

山田俊雄他『現代語・古語 新潮国語辞典』第二版、新潮社、1995

『日葡辞書』*VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM* (1603版復刻)、岩波書店、1960

土井忠生他『邦訳日葡辞書』（上記の邦訳）岩波書店、1980

『パヂェス日仏辞典』*DICTIONNAIRE JAPONAIS-FRANÇAIS* (1868版復刻)（『日葡辞書』のフランス語版）、一誠堂書店、1953

日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館、1972、1976

荒川惣兵衛『角川外来語辞典』角川、1969、出版は古いが、初出引用、語源説明が詳しく、今回の研究には最適と判断した。

田中秀央『羅和辞典』、研究社、1964

池上岑夫他『現代ポルトガル語辞典』、白水社、2005

研究書（キリスト教、聖書関係）

海老澤有道『日本の聖書』、日本基督教団出版局、1981

門脇清『門脇文庫日本語聖書翻訳史』、新教出版社、1983

海老澤有道他『キリシタン書、破邪書』、岩波書店、1970

豊田実『バイブル邦訳の由来』、惇信堂、1946

Toyoda Minoru, *A Short History of the Japanese Translations of the Bible* (上記英語版), The Japan Bible Society, 1957

Mカラン他『日本語の聖書』、ドン・ポスコ社、1958

日本聖書協会『日本聖書協会100年史』、日本聖書協会、1975

鈴木範久『聖書の日本語』、岩波書店、2006

柳谷武夫編、村上直次郎訳『イエズス会日本年報上、下』、雄松堂出版、2002、

研究書（日本語関係）

佐久間鼎『日本音声学』、風間書房、1963

土井忠生『日本語の歴史』、至文堂、1981

山口明穂他『日本語の歴史』、東京大学出版会、1997

佐藤武義『概説日本語の歴史』、朝倉書店、1999

橋本進吉『国語音韻の研究』、岩波書店、1969

橋本進吉『国語音韻史』、岩波書店、1969

中田祝夫他編著『音韻史・文字史』（『講座国語史2』）、大修館書店、1972